

9月18日礼拝説教(隅野徹牧師)短縮版「イエスの涙」ヨハネ11:28～44

今回とくに40節に注目します。イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言われた。この言葉は先週よんだ25節と26節を受けています。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていて(つまりこの地上の人生において)わたしを信じるものは誰も、決して死ぬことはない。このことを信じるか」というこの言葉を信じるなら、神の栄光を見ることができる…ということです。

色々つつぶやき、疑うことが多い私達人間の弱さをイエスはすべてご存じです。しかし、それをご存じの上で「信じてこそ、神の栄光は見ることができる。逆に信じないなら神の栄光をみることはできない。信じないものではなく、信じる者となるように！」そのようにして、イエスは私達を招いてくださっている、そう私は感じます。神の栄光・イエスの栄光とは「神の独り子が人々を救うために十字架で死なれ、墓に葬られていたその神の独り子が、父なる神によって復活させられる」ことによって表される「栄光」です。ラザロの「死からの復活」は、神の子であるイエス・キリストの十字架の死と復活をあらかじめ示すため、そしてその恵みは「信じる者すべてが受け取ることができること」を示すためのものです。

死は誰にでも必ず訪れるものです。ラザロがこのときイエスの奇跡的な業によって蘇りましたが、それは決して不死の命を得たというわけではなく、いつか必ず死を迎える日が来ることは避けられなかったことでしょう。しかし、「ラザロを蘇らせた神の子イエス・キリストは、ご自分の十字架の救い、復活の恵みに、ラザロをも与らせて下さる」「その神の栄光を信じる者は見ることができる！」そのことが、十字架に掛かれる前の最後の奇跡である「この場面」ではっきりと示されたのです。(終)